言心先生の中国便り

日本と中国の「距離」

近年、中国からの旅行客の数がかなり多くなった。彼らの中には、帰国後、日本に対する感想をつづった文章を書き、ネットで発表するものもいる。

中国の沿岸部の大都市から、東京、大阪までの飛行時間は、三時間前後で、中国の国内の大都市間の飛行時間より短い。彼らは、中国と日本の地理的距離が本当に近いと感じるようである。また、中国と日本は漢字を使い、文字の意味が半分くらい分かるから、文化的な近さも覚える。しかし一方で、日本人と会話できない上、英語を利用して会話すると、もっと「悲惨」なことが起きる。その時、日中両国の「距離」が顕著に感じられるという。

一番両国の「距離」を感じるのは、二つの国の綺麗さの差についてである。中国の大都市は表向きはある程度綺麗である。しかし、日本の場合は裏道、田舎まで綺麗で、来日した中国の知識人は非常に驚くのである。日本の秩序と環境の良好さも、来日した中国人にとって羨ましいことである。帰国後、彼らは何がその「距離」の原因なのかについて考える。

日中両国の「距離」が一番近い時期は、明治維新以前である。明治維新以後、日本は「脱亜入欧」の方向に向かい、両国の「距離」は段々開いていった。

維新の思想家は、先生の中国でさえ列強に敗れたなか、生徒の日本が幾ら頑張っても勝算はないと考えて、欧米に学ぶ道を選んだ。

中国の隋の時代以後、科挙制度が実行され、千三百年の間知識人は、受験の為に知識を勉強した。当然、そういう知識が社会のニーズとギャップを生じ、沢山の役に立たない知識が生まれた。

中国の明の時代の思想家王陽明氏は、知識は行動のため存在し、役に立たない知識は本当の知識ではないと断言した。日本の近代の思想家が王氏の思想を受け入れ、それが日本の近代化に大きな影響をもたらした。残念なことに、中国の知識人は、王陽明氏の「知行合一」の思想を日本人ほど大切にしていなかった。

改革・開放以後、中国も日本のように様々な方面で法律を作ってきた。しかし、実行されない「ザル法」はかなり多い。ある来日した知識人は、なぜ中国人が日本人と違い、勝手にポイ捨てをし、勝手に列に割り込み、勝手に信号を無視するかと深く考えていた。彼は帰国途中の飛行機で、中国の国の指導者と指導集団は国民が守らねばならない法律を作るが、自分たちですらそれを守らず、当然、そういうことが分かってしまい、国民も国の様々な法律を無視すると結論を出した。

この一刀両断の高論は、本当に見事だと思う。